

会 議 記 録 (概要)

会 議 名	平成29年度 第2回三田市スポーツ推進審議会
日 時	平成29年8月23日(金) 14時00分から16時00分
場 所	三田市役所 3号庁舎3201会議室
出 席 者	高見会長、藤原副会長、齊藤委員、谷委員、徳丸委員、古田委員 六反委員、渡委員
事 務 局 等	(市民生活部) 入江部長 (市民文化室) 仲井室長 (文化スポーツ課) 横溝課長、森鼻係長、梅垣 (コンサルティング業者) (株)地域計画建築研究所 石井
傍 聴 者	なし
添 付 資 料	レジュメ、資料8～資料12

会議概要

1. 開会 (14:00～)

2. 報告

- ・会議の成立
- ・委員・事務局職員紹介 (前回欠席委員のみ)
- ・傍聴報告
- ・第1回スポーツ推進審議会での調査結果【資料8】

3. 協議事項

① 三田市スポーツ推進基本計画にかかるテーマ別審議項目

(1) スポーツで「子どもに夢を！」

<事務局から説明>

委 員：「さんだっこ元気アップサポーター」について、小中学校へ運動の専門性に優れた指導者を派遣する、とあるが具体的にどういう方を派遣するのか。種目ごとに教えてほしい。

事務局：派遣制度について、学校教育関係の委員が不在のため分かりかねるので、次回。

会 長：「子ども」の定義について事務局はどのように考えているか。

事務局：保護者を含めた乳幼児から小中学生まで。今のところ資料ではそういう作り方で進めている。

委 員：一般論で言うと、子どもには乳幼児・園児・児童というように各段階あるが、乳幼児にスポーツはできない。園児には園児の遊び方がある。それをスポーツの中に入れて、対象者に園児を入れてしまうのは無理がある。中学生を「子ども」というのも正しいかはわからない。が、小学生から中学生までを子どもという範囲に設定すべきではないかと思う。乳幼児を含めるのは無理がある。

事務局：乳幼児に関しては親御さんも含めて対象であるということについて、スポーツ推進の考え方の中に健康・乳幼児の成長過程での体づくりということも含めて申し上げた。ライフステージに応じた運動、競技スポーツということになると区分けが必要なので、それ

も考えていきたい

会 長：前回の審議会でもスポーツの定義について、様々な運動遊び、通勤・家事も含めて身体活動とするとなった。

委 員：体を動かすだけなら家事も通勤も含まれるかもしれないが、推進計画の中でのスポーツから外れているのではないか。

会 長：各種目団体で行っている競技をスポーツとするのならそうなる。しかし楽しく体を動かすことを含めて三田市の推進計画ではスポーツとしている。

委 員：世の中のすべてがスポーツになってしまう。

会 長：スポーツを限られたものにしてしまうのではなく幅広くとらえていきたい。

事務局：子どもの定義は難しい。スポーツの世界ととらえると運動遊びから発達していく。子どもの発達段階に沿って考えていくと、赤ちゃんの時から運動をすることによって、手のひらを広げるという動作から始まるわけだが、そこから運動遊びに入っていく。なのでスポーツというのは、幼児、小学生、中学生が行うものという考え方でいいと思う。アンケートの中でも日常生活における身体活動をスポーツに含めているので、その考え方で問題ないと思う。

委 員：日常生活のすべてをスポーツとするのは、社会的な通念感覚において、拡大解釈になる。誰が聞いてもわかりやすい、納得できるものとする必要があるのではないか。

委 員：ストイックに行う競技だけでなく、幼児や高齢者、体の不自由な方でも行えるあらゆる運動も含めて幅広くスポーツとすればよいのではないか。子どもの定義についても、大人になる前の段階を広く子どもとすればよいのではないかと思う。

副会長：三田駅まで歩いたことをウォーキングとするか、これは個人の感覚である。最近ではレクリエーションもスポーツとしている。どこまでをスポーツとするかの明確な範囲を決めなければいけない。

会 長：三田市では何をスポーツとするか前もって定義づけしている。世の中ではなく三田市の考え方、とらえ方で進める。

<現状課題、今後の方針について事務局から説明>

委 員：私自身障害を持っているが三田市内の小中学校で駅伝の指導をしたり、連合体育大会前の練習会における陸上の指導を行っている。基本はボランティアで頼もうと思っているのか、もしくは経費が発生する方向で指導者を呼んだり、養成・育成を行うのか。スポーツ推進委員やスポーツクラブ21(以下SC21)では限界があると思う。前回育成プログラムが機能しないという話があったが、無償で人材を確保しようとするのでは今後も厳しいのではないか。ボランティアの域を出るのか出ないのか。

事務局：非常に難しい話である。トップアスリートの招聘には費用がかかる。地域での様々な競技スポーツのコーチはほぼ無償で行ってもらっている。中学の部活動はボランティアではなく教育委員会から派遣される場合もある。その場合はお金が出ている。地域の中では教育委員会を通さずに、個人と学校のやり取りで行われる場合もあり、それはおそらく無償で行われている。

色々な形のボランティアがあり、それによって地域のスポーツは支えられている。今はケースバイケースの中で動いている。

以前はSC21を推進していく中で、有償ボランティアが必要という考えがあったが、会費を徴収し日常的に指導者のお金を渡すのは難しい。無償になっているのが現状。

今後の指導者や生涯スポーツを推進する上での課題である。答えはまだない。

- 委員：人材確保にあたって人材バンクのような情報を、役所として確保できているのか。妻がボランティアコーディネーターをしているが、そういった方々はボランティアの地域・能力・人数などの情報を持っている。多世代活躍支援課が一括して情報を持っていたり、シルバーの生きがい応援課にもいろいろな能力を持った人がいる。それらを連動して活用できれば、支えるスポーツとしてもより活性化するのではないか。そのあたりの情報交換を密に行えないか。
- 事務局：以前はスポーツに特化した人材バンクは市が持っていた。それだけでなく様々な分野での人材の情報の紹介は行っている。しかし問題点として、需要と供給がマッチングしなければ派遣できないし、同じ方ばかりの派遣になったりした。有償でやっていたが、発展しなかった。学校ボランティアもそうなるのではないか。人材を確保できても派遣できるかは厳しい。やっていくのはいいと思うが、マッチングの仕方を工夫しなければいけない。
- 委員：地域での支援について、過去はSC21の組織強化部会で指導者の指導を行ったり、会員を対象に講演会を行ったり、スポーツクラブだけでなく三田市全体のために活動してきた。もっと行政がバックアップして一体となり、三田市をあげてのスポーツ振興のために協力していきたい。
- 委員：今はほとんどの子どもが競技として勝つためにやっている。上のステージでやるために競技に取り組む子どもと、楽しくやりたい子どもではっきり分かれている。指導者のあり方もかわっている。子どもたちのためとなるのは、安定して毎週来れる人や1年がかりで指導できる人。それを地域で見つけ育てなければならない。登録して派遣するというシステムではそれは難しい。

(2) スポーツで「高齢者に生きがいを！」

<事務局から説明>

副会長：文言について、「健康づくり」という言葉が出てくるが、健康はつくるものではなく維持するものである。体力がつくるもの。使い方を間違えないようにしてほしい。

事務局：見直す。

会長：高齢者スポーツスクールの内容について、何が行われているのか。

事務局：年2回ほどの簡単な講座で、昨年度は年1回しか行えていないため、人数は減っている。内容はヨガと気功とノルディック・ウォーキング(以下ノルディック)。平成27年度までの参加者は増加傾向にあった。

会長：「高齢者に生きがいを」というところで、言葉が適切かどうか分からないが、高齢者が弱者的な扱いになっている気がする。私は今年度60歳になるが、100歳体操をしようという気にならない。もっとアクティブな方々のためのものも作りたい。マスターズスポーツが世界的に流行っている。高齢者も競技志向で種目として楽しめるものが何かないか。

年配の方の競技交流の場を増やしていけないか。

今後60歳台に入る方はグラウンドゴルフはたぶんしない。現在ゴルフをしている人が70歳になったからグラウンドゴルフを、とはならない。世代によるライフスタイルの違いを把握しなければならない。

委員：仲間づくりや生きがいづくりについて、スポーツクラブに入っていないと行えないものでなく、市が一体となって三田市民のための規模の大きい催しを行いたい。また、シニアの大会をいろいろな種目で、競争意識を持って行える環境、場をつくらなければならない。

会長：ウォーキングのコースも作られているが、その成果は出てきているか。

事務局：10コースある。昨年からノルディックを進めており、数字のデータではなく感覚的にはあるが、歩く人は活発になっていると思っている。

会長：ウォーキングのクラブなどはあるのか。

事務局：現在はない。

委員：マラソンにはタイムがあり競技性がある。しかしウォーキングには競技性がない。イベントで人が集まっても協会やクラブ化は厳しい。

委員：各地区の中で事業としてやっているところはある。
競技性を求めクラブにすると費用が掛かる。各地域単位では行われていると思われるが、それらを一つにまとめた会を作るのは難しい。

会長：ノルディックポールの貸し出し状況は。

事務局：市内の体育施設で無料の貸し出しを行っている。頻繁に貸し出しがあるわけではない。市としては、市民の健康意識を高める一環としてノルディックを進めていこうとしているのだと認識している。あくまできっかけであり、そこからジョギングや仲間づくりにつながっていけばいいと思う。

会長：「ノルディックのまち三田」とは、考えていないのか。

事務局：特に考えていない。

委員：高齢者の定義は65歳からでいいのではないか。

会長：60歳としている根拠は何か。

事務局：WHOで定められているのと、60歳以上の人をすべて60代以上としてアンケートを取っているから。

委員：ノルディック教室の参加者はシニア世代とファミリーに分かれる。シニア世代がウォーキングに興味を示しているのは間違いない。しかしコースをポール持って歩いている人はいない。関心をもってもらうための工夫がいる。

副会長：ウォーキングは毎日するから、その日だけポールを貸し出しても続けられない。個人で買うにはハードルが高い。

委員：スポーツという枠組みに入れると、高齢者や体の不自由な人への敷居が高くなってしまふ。ノルディックはスポーツとして推進するだけでなく、膝への負担軽減など、福祉的な要素を持つことをアピールし、福祉の一環としての観点からの推進との両方をすべき。利用者は増えるはず。

委員：中学校での生徒の部活所属率は

事務局：90パーセントが何らかのクラブに所属している。そのうち運動部が80パーセントほどで、残りが何らかの文化部に所属している。

委員：資料8の×になっているところは生徒が少ないからか、指導者がいないからか、設備がないからなのか。

事務局：設備はどここの中学もあるはず。

委員：先生がいない。顧問の先生が立ち会わなければクラブを行ってはいけない。

委員：推進する側としては、縮小方向に向かっているのは止めねばならない。民間から指導者を呼ばなければいけない。

事務局：学校は教育として部活動を行っている。社会構造の変化もあるが、やっている子どもたちは教育とは思っておらず、競技としてやっており、ギャップがある。学校に任せるのではなく、地域が子どもたちを育てるという目的を持ち、学校でできなくとも地域型スポーツクラブで競技を行えるように進めなければならないが、実際には難しい。10数年前は参考として愛知県の半田市をあげた。そこは小中高が一つになり学校施設を使った地域型スポーツクラブを行う流れがあった。それに寄せるのか、もっと学校のクラブを活性化するか。今後課題として検討しなければならない。

会長：今後国会で学校のクラブは外部からの指導者が行ってもよいとする案が出るはず。質問等あれば事務局まで。

②審議会スケジュール

<事務局から説明>

会長：9月30日の審議会は午前10時開会に変更する。

4. その他

5. 閉会(~16時)

以上